

たわしの読書メモ・・ブログ 734 [廣松ノートⅡ— (2)]

・廣松渉『現代革命論の模索』新泉社 1972

読書メモの731の「マルクス・エンゲルス革命論の栞」で、[廣松ノート第Ⅱシリーズ]に入りました。[廣松ノートⅡ— (1)]と番号をふりました。

実は第Ⅱシリーズの最初の予定では、「初期マルクス主義三部作」から始め、第Ⅰシリーズの『事的世界観の前哨』で、メモを取り損なっているところを押さえると共に『科学の危機と認識論』を読んで、『資本論の哲学』……と読み進める予定だったのですが、わたしは、運動のための理論を自称していて、その理論化の作業として、学的事実の学習の必要性を感じ、哲学においては廣松哲学を読み込んでいるのですが、ファシズムの隆起的な状況で、宿題としての自己の、そして左翼運動・共産主義的運動の総括を進める必要性を痛感しているところで、廣松さんの「運動論」的なことを先に取り上げようとしているのです。

廣松さんは、マルクスの文献学的な研究をしているのですが、そもそもは運動家でした。で、哲学といわれる領域を中心にアカデミックの世界に入り込んでいったのですが、その著作には読み込んで行くと「闘争宣言」というような内容もあります。そして、運動的なところにコミットし続けていました。

実は、もろ運動家的なところでの共著『日本の学生運動』があるのですが(わたしはまだ入手していません)、単著の運動論的な本は、三冊しかありません(わたしは、勝手に三部作と呼んでいます)。最初 70 年代に二冊、最晩年に一冊出しています。最初の二冊と、最後の二冊はかなり趣も違うのです。わたしは、これら三冊とも再読ですが、そもそもレーニンがこてんこてんに批判しているマッハの本の翻訳をし、その理論の哲学的意味をも押さえて、レーニン哲学の批判をしているのですが、最初読んだときの感想は、結局廣松さんは「オールド・ボルシェビキ」ではないかという印象でした。かなり幅広く読んでいくひとなので、年代順に押さえていくと、他の理論との対話もでてくるのですか、結局、「マルクス・レーニン主義」の枠から抜け出せていないように感じたのです。今回の再読でも、結局同じ印象を懐いたままです。

読書メモは一冊ずつとっていくのですが、今回は、三冊全部読んでから、総体的なメモを三冊の読書メモを載せる「反障害通信」の巻頭言で書き、各論的に一冊ずつ、読書メモを目次をあげ、備忘録的に若干の切り抜きメモを残します。

実を言うと、次の読書メモ 735『新左翼運動の射程』を先に読んで、この本を読んだのですが、年代的に追うと、明らかに、こちらの『現代革命論の模索』が先になっています。これまで、だいたい読んだ順に読書メモを書いてきたのですが、今回は一挙に三冊読んでから、メモに取りかかっていますので、廣松さんの中でも多少年代での変化が出ていますので、出版順に並べ替えました。なお、最後の 736 の『東欧激変と社会主義』に付録的についている文は、この本の「第二部 新左翼運動革命理論の課題状況」「第二章 旧左翼の隘路と新左翼のコース」にもあります。時代的にはこちらの方の時代区分に属するので、

こちらの方に、読書メモを残します。

なお、この本は、最初 1970 年に盛田書房から出されたのですが、出版社が倒産して、改めて、新泉社から新装版として出されたものです。

目次

新装版への序言

序文

序説 新左翼運動の存在理由

第一部 新左翼革命路線の史的位相

第一章 マルクス主義革命論の第一段階

第一節 『共産党宣言』時代の革命論

第二節 四八革命と「永続革命論」

第三節 第一インター期の新展開

第二章 「第一段階」から「第二段階」へ

第一節 老エンゲルスの遺した問題

第二節 第二インターと修正主義路線

第三節 レーニン主義と革命性の復興

第三章 「第二段階」から「第三段階」へ

第一節 第三インターとその適合不全

第二節 マルクス主義の危機とその展相

第三節 新左翼革命運動の課題と位相

第二部 新左翼運動革命理論の課題状況

第一章 資本主義の“変貌”と現代革命

第一節 資本主義体制批判の視角

第二節 現代資本主義の“変貌”

第三節 現代資本主義と共産革命

第二章 旧左翼の隘路と新左翼のコース

第三章 武装大衆叛乱型革命路線の模索

付 「疎外革命論」の超克に向けて

あとがき

さて、切り抜きメモです。備忘録的に簡単に書き遺します。対話というか、問題提起を「・・・」の後に斜体文字で貼りつけます。

「序説 新左翼運動の存在理由」

「これに対して新左翼は、いわゆる社会主義諸国の現状と趨向は、共産主義社会への方向性を持った正常的発展の途上にあるものではなく、時を追って変畸の度を高めつつあると判断する。」22P・・・そもそも「変畸」せる革命で、労農独裁—ソヴェト独裁として出発して、党の独裁になった時点で、「社会主義の定立に失敗した」と押さえること。

「・・・・・・・・新左翼はこの意味に置いて—すなわちソヴェト形態を採るか否かといった次元においてではなく、より基底的な意味において—ロシア革命を固定的なモデルとはしない。」26P

「・・・・・・・・前衛党を只管(ひたすら)に信じて蹠(ついて)来る大衆ではなく、積極的・主体的にアンガージュする大衆の圧倒的な形成を自己に課する。」26P・・・前衛—大衆という設定自体が問題なのでは？

「エンゲルスもいう通り「無自覚的な大衆の先頭に少数の自覚した者が立って奇襲攻撃や革命をやった時代は過ぎ去った。今後においては、社会組織の完全な変革が問題であるところでは、いっどこでも、大衆自身もそのなかにならずにいるに違いないし、何が問題で何を目指して全身全霊をかけているのかを大衆自身がすでに知っているに違いない」(『フランスにおける階級闘争』に対するエンゲルスの序文)・・・・・・・・それを欠く限り、プロレタリアートの独裁がプロレタリアートへの独裁に転化することはけだし蓋然的である。・・・・・・・・」27P・・・この意味で、エンゲルスの予言通りロシア革命はまさに「変畸せる革命」になった

「—ちなみに、かくのごときは、民族闘争の延長線上に存立しうるものではなく、また構造的改良の積み上げによって準備されうるものでもない！—」27P・・・？ 総体的反差別の運動による関係性の構築や協働・協同組合的運動の中での関係性の構築

「第一部 新左翼革命路線の史的位相／第一章 マルクス主義革命論の第一段階／第一節『共産党宣言』時代の革命論」

「旧来の歴史は—当時まだ原始共産体—の存在を知らなかったマルクス・エンゲルスによれば—階級闘争の歴史」38P

「ルンペン・プロレタリア」40P・・・現在のには非正規雇用の拡大の問題からとらえ返す必要

「この政治的支配、すなわち、プロレタリアートの独裁は、暴力的に実現されることならざるをえまい。」40P・・・27Pのエンゲルスの引用と矛盾

「『宣言』には、労働者階級が自然成長的に階級形成をとげ、全国的な団結を勝ちとるであろうことの“客観主義的”ともみえる叙述はあっても、前衛部分の積極的な介入の思想は欠けてる。しかも、単なる叙述の欠落ではなく思想上の問題である。」44P・・・「前衛論」的なことはマルクス・エンゲルスにあっても、それをどこまで積極的に突き出そうとしたのだろうか？

「・・・・・・・・前衛部分とプロレタリア大衆との動力学的な相互関係、プロレタリアート

を階級として形成するうえでの組織戦術や組織形態などについては何一つ語られていない。」45P・・・そもそも「前衛党論」自体を反差別論の地平からの止揚の必要性

「第二節 四八革命と「永続革命論」

「われわれはここで余りにも有名な『一八五〇年三月の共産主義者同盟中央委員会の同盟員への回状』における永続革命論をみななければならない。そのなかで、われわれはマルクス主義における革命的ゲヴァルトの問題、“別個に進んで同時に撃つ”統一戦線戦術、“主要打撃”の問題、選挙に関する問題、等々について、マルクス主義革命論の原像ともいえるべきものを確認することができる筈である。」50P・・・回状の主旨、反ファシズム統一戦線との関係、永続革命論が武装蜂起・権力奪取・プロ独の樹立と進むときの画段階的区別性、すなわちプロ独の樹立以前と以後では意味が違ってくる。

「労働者は、単一不可分のドイツ共和国をめざしてつとめるだけでなく、この共和国内でも、権力を国家権力の手中にもっとも徹底的に集中することを目標としてつとめなければならない。……一七九三年のフランスでそうであったように、今日のドイツでも、最も厳格な中央集権化を実現することが真の革命党の任務である。」（『回状』からの引用）57P・・・中央主権化やプロ独論では、国家主義へのとらわれに陥っていく、幻想共同体としての国家规定から、反差別の地平からのとらえ返しの中で、中央集権化ではない、地産地消の地方分権化としての革命の可能性をとらえ返すこと。

「……………この(永続革命論の)発想が鮮明に押し出されたのは何とんでもこの『回状』においてである。」59P

「この独自の武装＝二重権力の構築という方針は、二段階戦略的な発想からは出てこないものであって、これが永続革命論からの必然的な帰結であることはあらためて指摘するまでもあるまい。……………」64P

「前衛による一元的な階級型性とその指導による大衆操作主義的な階級決戦という発想ではなく、あくまで、それ自体物象化されて自己運動するところの大衆闘争の動力学にふまえて、そこに現出するであろう諸派のヘゲモニー争奪の予料のうえに立って、当の渦中に自らアンガージュすることによるキャナライズということ、『回状』ではこの基本的な構えが貫いている……………」65P・・・必ずしも前衛—大衆という図式ではない押さえ、でも前衛党論からすると矛盾するのでは？

「第三節 第一インター期の新展開」

「「……現在の専制的制度を、自由で平等な生産者の連合社会という福祉をもたらす共和的制度でおきかえることが可能だということを実地に証明する点にある」という、労働者階級が、「協同組合的商業よりも、むしろ協同組合生産」に力点を移すように勧める。」75P・・・生産・流通・消費の協働・協同組合運動

「……………マルクス・エンゲルスは、一方では既存の国家機構を狡猾的に利用しようとするラッサール派的な行き方を卻けると同時に、他方では国家の即時的な廃止を志向するプルドン主義的ならびにバクーニン主義的な無政府主義をも卻け、既成国家機構の粉

砕、プロレタリア独裁、それを介しての国家一般の死滅という原則を具体化するに至った。」75P・・・プロ独から国家死滅への道が永続革命論としても、それが示されていないところで、国家主義に陥っていく危険性

「・・・・・・・・「労働者階級はできあいの国家機構をそのまま掌握して、それを自分自身の目的のために行使することはできない」ということ、旧来の国家機構は唯粉碎するしかないということ、この知見が明確に確立されるに至ったことである。」83P・・・この方針で、それを踏み外す国家主義に陥ったことの総括が必要

「マルクスは、アメリカとイギリスに限ってであるが、一八七一年のクーゲルマン宛の手紙以来、議会を通じてプロレタリア政権が確立されうる可能性をいち早く認めていた。ブルジョア民主主義が確立しているという理由で以って、これら両国での“平和革命”を認めるとすれば、ヨーロッパ諸国でも、ブルジョア民主主義が確立された場合には議会を通じての革命が可能だという帰結になる筈である。一八七〇年代のエンゲルスはしかし、労働者階級が国会に進出していくよりも早いテンポで革命的な危機が訪れると予測していた。／マルクス・エンゲルスは、ロシアに革命が迫っていること、このロシアの革命を契機にして全ヨーロッパの解放が闘いとられるということ、このことを確信していた。」90P・・・ロシアに「革命」は起きた、しかし全ヨーロッパには波及しなかった。そしてロシア革命の“変畸”も顕わになった。

「第二章 「第一段階」から「第二段階」へ／第一節 老エンゲルスの遺した問題」

「・・・・・・・・ドイツ社会民主党は、新しい階級的特権や特典のために闘争するのではなく、階級そのものの廃絶のために、国籍や性別や出身などによる差別のない平等な権利と平等な義務のために闘争するものであり、今日の社会の内部においても、あらゆる種類の搾取と抑圧に対して闘う。」(カウツキーの手になる『エルフルト綱領』の諸命題の一つ)99P・・・差別を総体的とらえ返そうという観点があります。「抑圧」の後ろに「排除型の差別」があるので「と排除」の文言を入れるか、「抑圧」の代わりに「差別」と入れることが必要。

「エンゲルスは、ここで、市街地の構造の変化や交通機関の発達、兵器の高度化と改良、その他の諸条件が、叛乱者側にとっていよいよ不利になっていることを指摘したうえで、次のように自問自答する。／「・・・・・・・・将来の市街戦は、こうした不利な状況を他の諸契機で埋め合わせた場合にのみ勝つことができる。・・・・」106P・・・武装蜂起—権力奪取—プロレタリア独裁権力の樹立というコース自体のとらえ返しが必要なのですが、この問題は反革命クーデターへの対処問題としては、必要になってくこと、韓国におけるクーデター未遂事件からのとらえ返しとしても、検証していく必要

「第二節 第二インターと修正主義路線」

「ベルンシュタインの主張は、帰するところ次の四項目に整理・・・・・・・・第三に、民族的利害を現実主義的に考慮すべきことの主張である。プロレタリアートには祖国がないといわれ、インターナショナリズムが建前として唱えられるにせよ、世界革命の同時的遂行

が現実性をもたない現状では、フランス革命におけるジャコバン党の政令にみるごとく、ドイツ社会党も民族的たらざるをえない。しかも労働者階級は、もはや、経済的・社会的・政治的に、一定の失うべきものを持ちはじめており、民族的利害に無関心ではおれない歴史的現実のもとにある。・・・・・・」120-1P・・・まさにこの論理が運動を革命を潰す論理になっている。今日のグローバリゼーションが世界を覆った時代にあって、民衆の窮乏化は進んでいます。

「ドイツ社民党では、マッセン・ストそのものの反対するものは一部に限られていた。ベルンシュタインですら、反対しなかった。党そのものにおいては、この(マッセンスト)戦術の位置づけをづけをめぐって意見の対立があったにすぎない。すなわち、議会主義を前提にしたうえでの恫喝として認めるか、それとも、権力奪取に向かう基本的な戦術として採用するか、対立点はここにあった。・・・・・・」125P

「ゼネラル・ストライキは、まだそれでは権力の問題をただ提起するだけであって、解決にはならない。権力の獲得には、ゼネラル・ストライキのうえに武装蜂起を組織する必要がある。ローザ・ルクセンブルクの全発展は確かにこの方向へむかっていた。だが、彼女は、その最後の言葉、あるいは最後から二番目の言葉をすら語らないうちに、舞台から去ってしまった」(トロツキーの一九二四年のことば)126P・・・ローザはむしろ情况分析を誤ったドイツ共産党の武装蜂起にひきづられ、殺害されたのでは？

「・・・・・・ドイツ社会民主党は、こうして、現実の運動においては修正主義の路線に陥りつつ、そしてタテマエのうえではあくまでマルクス・エンゲルスの古典的な諸教義を墨守し、自己の思想を、そしてエルフルト綱領の最大限綱領を空洞化させていった。」

126-7P

「「正当派」のごとく歴史的な状況の変化に眼を覆い、教条の復唱に終始するとき、理論的・思想的な“風化”は必定であって、いやしくも運動を続けようとする限り、結局は歴史の現実には押し流されざるをえない。「正当派」の代表的な指導者であったカウツキーがついに修正派に屈伏したこと、さなきだに第二インターナショナルが“崩壊”せざるをえなかったことは、それを象徴的に表現したものにはほかならない。」128P・・・「正当派」批判

「ドイツ社会民主党に限らず、帝国主義諸国の議会主義政党は、選挙民の支持を確保するためには、どうしても“祖国防衛主義”を自らも掲げざるをえず、加速度的に体制にのめりこんでいった。／この間を示す一齣を、フォスターの「三つのインターナショナルの歴史」(インターナショナル研究会訳)の雄弁な筆致を借りて一瞥しておこう。・・・・・・」

129-30P・・・そもそも国家主義的なところへのとらわれ、「国家の幻想共同体」規定の欠落

「第三節 レーニン主義と革命性の復興」

廣松さんのレーニン主義の押さえ4点——「第一に、暴力革命論の復権」「第二に、資本主義体制の「破局」の必然的な到来をあらためて確説したこと」「第三に、プロレタ

リアート・インターナショナリズムの回復」「第四に、中間的諸階層との積極的な同盟の理論」142-4P・・・そもそも農民に基盤をもたず、他党派解体戦略を展開したのだから「同盟」にむしろ失敗したのでは？ プロ独論自体の問題性

「レーニン主義は、その革命路線と相即的に、前衛党論、組織論をも再編した。・・・・・・」144P

「レーニンの組織論は、それが第二インターナショナルの議会主義に見合う組織論と相違するだけでなく、マルクス・エンゲルスのそれとも了解を異にすることを看過できない。・・・・・・前衛党はその思想的純粋性を組織的にも保証維持しつつ、広汎な労働者大衆に階級意識を「外部注入」すること・・・・・・」145P

「“主要打撃”論」146P・・・『第四の同盟』144Pとの矛盾

「このレーニンの路線の実践的現実性を立証することになったもの、それがロシア革命の成功であった。・・・・・・」147P・・・社会主義の定立に失敗したのだから、「成功」とは言えない、むしろ共産主義運動の桎梏となった。

「第三章 「第二段階」から「第三段階」へ／第一節 第三インターとその適合不全」

「レーニンは、しかし、永続革命論のシェーマだけは依然として堅持したものと思われる。・・・・・・」156P・・・永続革命論の中味をとらえ返す必要

「第三節 新左翼革命運動の課題と位相」

「・・・・・・資本主義の「段階」規定は、そもそも具体的な歴史的総体としての資本主義の構造的定在に即しておこなわるべきものであって、純粋に経済学的な規定ではないはずである。現にレーニンにおける段階規定もそうであったし、そのことにおいてまた、それは実践的有効性をもちえたのであった。マルクス主義者は、今日レーニンの故知に倣うべきであろう。」188P・・・レーニン主義の宣揚？ 帝国主義論やローザの継続的本源的蓄積論、ネグリ／ハートの「<帝国>」におけるグローバリゼーション、ファシズム論なども含めてとらえ返すこと。

「現代資本主義の経済的・社会的・政治的メカニズムを分析し、その段階的特質を論定する作業は、・・・・・・現代資本主義のもとでは、革命路線をどの方向で再構築することが歴史的に要請されているか、臆断をおそれず幾つかの論点を挙げることにしたい。／第一に、「破局」の自動的な到来を大前提にせざる戦略を構築すること。・・・・・・／第二に、革命的ゲヴァルトの新しい組織形態を創出すること。・・・・・・／第三に、生産の場に立脚した労働者階級の自己権力と革命的議会主義との結合。・・・・・・」188-91P

「第二部 新左翼運動革命理論の課題状況／第一章 資本主義の“変貌”と現代革命／第一節 資本主義体制批判の視角」

エンゲルスの『エルフルト綱領』の中での。これまでの綱領のとらえ返し 208-11P・・・ポスト・グローバリゼーションの時代の更なる変化

「第二節 現代資本主義の“変貌”」

「恐慌はどうか？ 軍事スペンディングをはじめとする資本と労働との大量的浪費を不可

欠の前提とした——この意味で——原理的には縮小均衡によって、恐慌が辛うじてコントロールされていることは多言を費やすまでもあるまい。恐慌という爆発的な価値破壊が浪費的なスペンディングという恒常的な価値破壊で置換されただけであり、ここでもまた、資本関係そのものが可能的生産力の桎梏になるという矛盾が厳然として存続し、いよいよ尖鋭化している。」218P・・・今日の軍拡路線

「・・・・・・・・レーニン『迫り来る破局、それとどうたたかうか』のなかで、「社会主義は、全人民の利益に奉仕するようになった。……国家資本主義的独占にはかならない」。「社会主義は、国家資本主義的独占からの唯の一步を進めたものにかならない」と書いている。今や問題は、主体的条件である。」223P・・・唯物史観を踏み外している、資本主義的關係性の中で、主体がどう形成されるのか？

「第三節 現代資本主義と共産革命」

「勤労大衆の絶対的窮乏化、失業者群の増大と被救恤(きゅうじゅつ)民化、経済恐慌の周期的爆発、等々が、もはや、古典的な現象形態をとって定在しなくなったところから、革命論にとって幾つかの重大な問題が提起される。／第一は、労働者大衆の日常性への埋没からいかにして脱出しようかという問題である。・・・・・・・・／第二に、社会主義社会のヴィジョンが問い返される。・・・・・・・・／第三に、革命の客観的条件との関係で問題が生ずる。・・・・・・・・」224-6P・・・相対的窮乏化の問題があり、また、帝国主義からポスト・グローバル化の時代の資本主義は継続的本源的蓄積なしには存続し得ないところで、差別の強化・差別主義的なところが繰り返して起きるし、体制を維持するために、戦争の危機を煽り続け、軍拡路線に踏み込み、福祉の削減などで、むしろ民衆の生きがたさはなくなっていくところか、増してくる。

「・・・・・・・・生産力水準の飛躍的な上昇という前提のもとで、未来社会においては、効率よく組織化された中央管理社会ではなく、むしろ効率＝産業合理主義を第一義とせぬゆとりある社会が現出する筈である。・・・・・・・・」232P・・・そのためには、悪無限的に利潤を追求する資本主義を止揚しなければならない

「・・・・・・・・今日では、いよいよ、下からの労働者自己権力の運動が絶対的に必要である。・・・・・・・・」236P・・・その一形態としての協働・協同組合的運動

「第二章 旧左翼の隘路と新左翼のコース」

「・・・・・・・・しかも、かくのごとき労働者階級の体制外在化的覚醒は、改良主義的・経済主義的闘争のつみあげ自体によっては決してもたらされるものではなく、前衛的部分が体制そのものに対する最大限綱領的批判を不断に、系統的に「外部注入」することによってのみ実現することができる。」257P・・・労働者にも自ら抱える差別の問題があり、反差別の闘いから総体的に差別をとらえ返すことによって、闘いの主体は「外部注入」ではなく形成される。

「第三章 武装大衆叛乱型革命路線の模索」

「・・・・・・・・先進国革命の現実的展望を拓きえんがためには、破局的な大恐慌や帝国主

義間戦争といった“自動崩壊的”な破綻を前提としないところの革命論が構築されねばならない。大恐慌や世界戦争の可能性は依然として存在するのであるから、この種の破局が来ないと断定するわけではないが、しかし、その必然的な到来を大前提にしない革命論を構築しなければ、いたずらに危機を待望して蹶起の時を失すること必定である。」

280P・・・ファシズムとの対峙論的なとらえ方も必要

「・・・・・・・・当の闘争の現実的可能性は、単なる目的意識的な組織化によって拓けるものでなく、それ自体、恐慌の爆発という形はとらないにせよ危機的な様相が現出する循環局面、社会経済的構造の位相転換局面という——物象化されて法則的な推移をみせる——客観的な条件と相俟たねばならない。・・・・・・・・」 281P

「・・・・・・・・拠点における目的意識的な先駆的突出闘争を槓杆にして推進しようと図ったもの、それが拠点山猫型マッセン・ストの構想であるということが出来る。」 287P

「付 「疎外革命論」の超克に向けて」

「疎外革命論の主張には、なかんずくスターリン時代を通じて教条化され硬直化してマルクス解釈へのアンチテーゼとして当っている点もあり、幾つかの新しい問題提起もみられる。・・・・・・・・」 297P

「・・・・・・・・ゲーテその他によって独訳され、ヘーゲル派で定着した語義に目を向けよう。そのとき「疎外」が特別な主体概念と不可分であることは誰しも気付く通りである。ヘーゲルにおいては彼のいわゆる「精神」が当の主体概念であった。ヘーゲル左派においては、この「精神」が改竄ないし転置されて、シュトラウスの「人間性」。バウエルの「自己意識」、フォイエルバッハの「類的存在」となった。・・・・・・・・」 300-1P

「・・・・・・・・ドイツ古典哲学と古典派経済学とフランス社会主義との総合的統一を媒介にしたもの、それが中期ヘスの一連の論稿と初期マルクスの『経哲手稿』にほかならない。」 307P

「・・・・・・・・マルクス・エンゲルスはまさしく真正社会主義の疎外革命論を克服することによって「科学的社会主義」を確立しえたということ、現代の疎外革命論者たちは、真正社会主義や聖マックスの革命論の域を一步も出ていないどころか、そのミニチュア版にすぎないということ、それはマルクス・エンゲルスによって批判的に克服されているのだということである。」 336P・・・後の「科学主義」批判

「常識的な意味での疎外論——これですら結局はある哲学的人間観と不可分であり、哲学的疎外論の俗流版なのだが——それは記述概念としてしか許されず、原理的な説明概念とはなしえない。哲学的な意味での疎外論、それは依って以って立つ主体概念の難点の故に——そして語の本来の意味におけるイデアリスティッシュ・イデオロギッシュな性格の故に——維持されがたい。・・・・・・・・」 337-8P